昭和60年7月1日発行　(財)高知市文化振興事業団

文化高知 6

旬と心と技術

竹内和夫

昭和五十五年秋に長男の結婚式を東京のホテルで行った。その時の披露宴で、来賓としてご出席下さった鳩山威一郎先生からご祝辞をいただいた。その内容は私どもの商売柄、料理にまつわる話で、ある高名な料理の先生に（多分、辻留主人の辻嘉一さんと思われる）「おいしい料理を作るコツはなんですか」ときいたところ、「第一に旬のよい材料を使うことです。第二によいものを作ろうとする心です。第三に技術です」と言われた。私は第一に、技術という答えを予想していたので、たいへん印象的であった。さらに人間も同じで、健康で向上心を持ち、学問に励むことが大切である、という様なスピーチをされた。

早朝、魚市場で新鮮な魚介類と出会い、旬の最良品を仕入れた時の喜びは筆舌に尽くし難い。日本料理の心髄は正に材料にある。私どもの企業は日本料理（土佐料理）を中心に高知に四店、京阪に四店、東京に七店の計十五店と、やや業態の異なる店が三店ある。春夏秋冬の季節の最高の材料を、毎日各店に揃えるのもたいへんな仕事である。

鮮魚を例にとれば、よい材料はさしみにしても、煮ても焼いてもおいしい。素人の方がさしみを縦に切っても横に切ってもうまいが、年期の入った調理師が、よい器に季節のいろと香りを盛り込んだ料理は一段とうまさが増す。料理店はお客様より「あの店はいつ食べに行ってもうまい店だ」との評判がたたないと繁昌しない。

「ほたるぶくろ」　西本倍崇

昔から三日、三月、三年という言葉があるが、高校を卒業し入社三年ともなれば逞しい青年となり人相までよくなる者が多い。昔の徒弟制度の中での修業と違い、比較的に自由な時代の修業は、本人の自己開発能力が第一のポイントとなっている。よいものを作ろうという心を、形に表現出来る迄の修業は、たいへんな努力がいる。しかもその迫力は静かなものでなければならない。二十五、六歳頃で結婚し、三十歳前後で数人の部下を指導する様になる。すると、休日や休み時間に百貨店の催場や美術館に陶器、書画を鑑賞に行き、俎板の上だけが世界で無い事が自覚出来る様になる。三十五、六歳頃より技術は長足に進歩し人間的魅力も備わりだす。これが優秀な調理師の平均的パターンである。

最近、全国的に居酒屋ブームでスーパーマーケットで売っている冷凍食品、練製品、つくだ煮等を器に盛って料理として出している店が多い。低価格競争で若者達の利用もあり結構繁昌している。調理師もインスタントで、アルバイトで三日も行けば、売っている料理はほとんど出来るとのことだ。飲食業も多様化の時代に突入しているが、底流として飽食の時代、グルメ指向、本物指向、高年齢化社会等をみると定年の無い本物の調理師こそ、ハイテクノロジーの象徴ともいえる花形職業ではないかと考える。

（土佐料理　司　代表取締役）

リオの夜

安藝真一

リオ・デ・ジャネイロの空港に着いたのは真昼近く、タラップから降り立った瞬間、からみつく様な熱気が立ち昇る。ゆき過ぎる地上整備の男に、今日の気温は？と訊けば「三十九度」とつぶやく影が陽炎の向こうに、ゆっくりと消えて行く。

カーニバルの午後の街並はオフィス、商店、レストランがことごとく閉店して、異様な静まりが、ふと戒厳令を連想させる。町の辻々に光る眼の群れがあり、見えない無数の腕がからまり合って太陽を西の空へ引きずり降ろして夜を創ろうという幻覚が横切る。

日暮れた街角から地鳴りのようなサンバが聴こえてくる。街道を三千人程の黒い集団が首筋と肩を金色の汗に光らせながら揉み合う蛇の群れのように走り抜けた。

リオの上流社会だけが高価な会員券を払って集合するというホールの内部は、絵具箱を引っくり返した上に、金と銀をブチ込んだ液を全身に浴びた衣裳の男女が群れ集い、やがて銅鑼の強打を合図に、すさまじいサンバの叫びが噴きあげると、アッという間に広いホールが超満員の渦巻きになった。全員がサンバを合唱し、掛け声は絶叫に変わって、汗で金色の虹が飛びちがう。床、壁を問わず天井近くまで人の足の立てる所は隙き間なく男女がはりついて手を振りまわし脚を上げる。踊りの渦はぶっつゞけで三時間、更に午前零時をまわりホール全体が巨大な楽器になっている。

カーニバルの最後の夜、街の目抜きのストリートに用意された四階建て程の桟敷は、遥かな山地から降りて来た貧民に市民が重なり観光客を混ぜあわせての大群衆で埋めつくされた。地の底から炸裂した色どりで、エスコーラ・デ・サンバのチームが波濤のようになだれ込んで来た。一チームそれぞれに一千人、二千人、二千五百人という、とてつもない巨大編成が、一年中考えたであろうと思われる、きらめくコスチュームを身につけて、数百の渦を撒き散らしながら進んで来る。電気仕掛の音は全く無く、すべてが生の楽器の連打と踊り子達と観客の大合唱――。いつしか丑三つどきも越えて狂った夜に朦朧と意識が揺れはじめたころ、東の空が白みはじめた。瀑布のような大拍手の中をこの年の最優秀に決定した二千五百人のチームの波が押し寄せて来る。夜明けの空を背に、金と白と赤の隊列が津波のように迫ってくるのを望遠レンズでとらえながらファインダーが何故か涙でくもり、シャッターを握る手が慄えついて離れない。

その年の夏、私達のチームは、よさこい祭りに初めてサンバを持ち込んで参加した。リオの興奮はまだ余熱のように身体に残って居たけれども、あのカーニバルを意識してのそれではなく、踊るならサンバ以外にはないという自然な呼吸感があったのである。

よさこい祭りは、その創世期においては、不況克服、商店街振興という、かなり即物的な人工の祭りであった。それが三十年という時を経て、この祈りのない祭りに市民の驚くべき参加意識が堆積していて、特に若い世代が導入したロック・ビートと振り付けのヴァリエイションによって、すさまじいエネルギーの電圧を持ち共鳴振動を握った。リオの向こうを張ったり、阿波踊りを追い越すといった短絡を無視し、土佐の熱気と汗一本に参加者が独創性を野放図に投げあった所産がこの成長を生んだのである。

あのリオの夜、私が引きずり廻す撮影器材と荷物を狙って、十数人の男達がつきまとい続けた、夜更けて、いつか側に寄って来た見知らぬ娘が、つきっきりで泥棒達を追い払い夜通し監視を続けてくれた。四日三晩踊りつづけた踊り子の群れが涙をあふれさせながら抱き合ったまゝ、街々に散ってゆき、潮が引いたような桟敷に裸電球が朝の光の中に消し忘れられたまゝ、残った。礼をいう私に彼女がかすかに微笑して瞳が濡れて光った。

胸の鼓動がいつしかサンバのリズムになった。

（インテリア・デザイナー）

お先にどうぞ

宮地弥典

夕刻の道路はいつものように混雑しはじめていた。車を走らせて、小道から国道へ合流しようとした時のことである。私が一時停車するやいなや、右から国道を走って来た茶色のライトバンがピタッと止まり、運転席の男性は笑顔で手を差しのべて「お先にどうぞ」というジェスチャーをするではないか。私は少し慌てて、その好意に応えようとアクセルを踏んだが、いつもの癖でチェンジレバーをニュートラルにしていたので空ぶかしを一発して国道に合流させてもらった。いつもと違い意表を突かれたのである。

高知ではこのような時、誰かが道を譲ってくれるであろうと十台ぐらいの車を見過ごすことが普通で、多くの場合は期待はずれとなり、心ならずも徐々に割り込むという方法を使って合流することになる。

同じことが都会と高知を結ぶ飛行機の中でも多い。到着機から降りようと席を立ち、通路の人の流れに入れて欲しい雰囲気を満身に漂わせて待ってみるが、多くの場合は高知の路上と同じ方法を使わないと最後の降客になりかねない。これが高知以外の路線ではサッと通路を譲る人が多いし、都会と都会を結ぶ機内の方がマナーが良いように思う。

話を元に戻すが、私に道を譲ってくれた茶色のライトバンは沖縄のナンバープレートをつけていた。以前に何度か那覇市内を走った時に感心させられたことだが、沖縄県人はみんながサッと道を譲り合う。小道から大通りへ出ようとして一時停車をする前に、大通りの車が先に止まって「お先にどうぞ」という感じである。それも「あなたが先に行ってくれないと、私が困るのです」といわんばかりの雰囲気をもっている。

飛行機の通路をあけてくれるのも似た心づかいが伝わってくる。

それがどういうわけか、土佐人には「オラがオラがの高知県」という感じを与える人が多い。親切先進県、沖縄県人を見習って「お先にどうぞ」を早く県内に広げなければと思う。

（宮地電機株式会社 代表取締役社長）

豊かな自然のなかで

深石有利

縁あって高知に移り住んで三ヵ月。まだ数ヵ月しか経たない私が高知について、あれやこれや書くのは、おこがましい気がするが、自然も土地も人も、とても懐が深くその度量の広さで誰をも受け入れてくれるので、拒絶反応もなくすんなりと馴染んでしまいました。振り返ってみても、まだそんなに時が経ってないのかと不思議なくらいです。

日本では、大体どこにいても多少の四季を感じることができますが、春ひとつとっても、ここほど濃やかに移り変わりを肌で感じさせてくれる所はないでしょう。花は、梅、桜に始まって、つつじ、しょうぶ、さつき、あじさい……と次々花の便りが聞こえてきます。また、自然が豊かで、昼間は澄みきった青空、夜空は満天の星。海のイメージの強い街だが、実際には、海に面している所も山がせまっていて、その山といえば緑が目にまぶしいほど。以前より汚れてきたそうだが、まだまだ美しい川の水など、書けばきりがない。

この自然の中で仕事を始めて、何度となく耳にするのが「町や村の名産品づくり」運動です。今、全国的に、村おこし、一村一品運動が広がりつつありますが（都会で、学生という身分で漫然と暮らしていた私にとっては、恥かしいことながら全く知らなかった）、大分県で始められたこの運動を、高知で本当に目の当りにして、取り組んでいる人達の力強さ、逞しさに圧倒されてしまいました。我が町村や特産品を紹介する青年団の人々は皆、日頃はきっと無口で寡黙な人であると思われるのですが、とつとつと、時には能弁に話をされる。大正町のクリ焼酎、馬路地村のやなせ杉の民工芸品、本川村のキジ養殖、鏡村の梅のホケキョ漬け、土佐山村の山菜づくし、三原村の土佐硯、梼原町のぜんまい漬け、物部村のゆずドリンク等々。彼らにとって生活にせまられた、死活問題につながることから発しているこの名産品づくり運動などを、文化と呼ぶと語弊があるかもしれないが、自分達の住む町村の残された美しい自然を生かして生き残ろうとする必死なエネルギーこそ、新しい高知文化の創造の源と考えます。生活に根ざし、爆発的な力によって生まれでるもの、これこそ二一世紀につなぐ高知文化の原動力とよぶのにふさわしいものではないでしょうか。

（RKC高知放送キャスター）

青バナへの郷愁

池　俊行

明治の終り近く、私は高知市の江ノ口に生れたが、間もなく布師田に移り住むことになった。家の前には昔、一木權兵衛が泳ぎをたのしんだという美しい川が流れていた。

堤を降りるとそこは流れは急だったが浅瀬になっていて、朝早くきまって年とった女の人がやってきて不思議な手法で鮎をとっていた。いつも三人連れでくるその人たちは、川下に向って両足を八の字に広げて急激な流れの浅瀬に坐りこむ。そして、両の掌を八の字にして、開いた両モモのもとにつけて獲物を待つのである。

しばらくすると、ツンツンとくるらしく、その人たちの掌がはげしくうごき、つかまえた鮎が首にかけている袋の中にほうりこまれる。跳ねあがる銀鱗の美しさ。尋常小学校に上ったばかりの私だったが、時間のたつのも忘れてうっとりと見とれてしまうのだった。朝のすがすがしい光のなかで、そうした動作をくり返している人たちの姿が、不思議な魅力で私をとらえ、「さ、早う帰って――学校におくれるきに」と母に呼ばれるまで、浅瀬のそばに立ちつくすのだった。

その頃の子供はみんな青バナを二本ぶらさげていた。たれてきたら、綿入れの着物のそで口でぬぐうので、乾くとそのあたりがピカピカに光っていた。いまの教育ママに見せたら何と言うだろう。

いちれつだんぱんはれつして、にちろせんそうはじまった。さっさとにげるはロシアのへい、しぬまでつくすはにほんのへい……。

別に戦争のことを考えているわけではなかったが、こういう数え歌をうたいながら遊びほうけたあの頃がなつかしい。

人間の記憶が、歳月の流れの中で、うすれ消されて風化していく中にあっても尚消えない記憶が残っていることがある。それはもはや、一つの心象の世界に変質しているかもしれないが、生涯忘れることの出来ない活動写真への出会いを私は思い出す。

――大正五年の春。高知市にある「鳳館」という小さな活動写真館の入口に一人の少年が現われた。尾上松之助が目玉をむいた泥絵のようなあくどい看板を一心に見入っていた少年は、モギリのおばさんの前に、両手をひろげてエイッ！　エイッ！　と声を出してインを結んだ。そして、おばさんの顔をのぞき込むようにして「ボク、消えろう」という。何のことやらわけがわからず、おばさんはケゲンな表情で、「消えちゃあせんぞね。ちゃんと立っちょるぜよ」とこたえると、少年はがっかりしたように肩を落して去って行った。

その翌日も翌々日も、少年はやってきた。そして、懸命にインを結び、エイッ！　エイッ！　と叫び声をあげた。その声を聞きながらおばさんはハッと気がついた。

「ああ、消えたとも……何にも見えんぞね」といった。ニッコリ笑うと少年は、煙りこそ出なかったが、風のように活動館のくらがりに消えていった。その少年が、じつは私だったのです。

そんな活動狂だった私は大阪に出ると大学を中退し、両親の反対をおしきって映画説明者（活動弁士とも呼ばれていた）となったが八年後、トーキーに追われてその職を失った。

しかし、映画への愛着は絶ちきれず、シナリオ書きの道を選んで上京した。

以来四十数年に亘るシナリオ作家生活を経て昨年五月、黒沢明監督と一緒に第八回シナリオ功労賞を受賞した。

去る六月二十三日、高知に招かれて久しぶりに阪東妻三郎主演の無声映画「坂本龍馬」を説明したがしゃべる快感は又格別のものであった。

映画会が終って、坂本龍馬生誕百五十年にわく市街を歩きながら私は、今は亡きシナリオ仲間の北村勉を思い出していた。彼も高知市の生れで、昭和十四年には、長塚節の「土」を脚色、内田吐夢監督で見事ベストテンの第一位に推されている。翌年には尾崎一雄の「暢気眼鏡」をシナリオ化し、つづいて真船豊の「山参道」を脚色して第一線作家にのし上り日活多摩川撮影所最高の稼ぎ手だったが、家に行けば障子は破れ、妻君は洗いざらしの着物を着かえる術を知らなかった。稼ぎのほとんどが酒に消えてしまうからだった。

当時、文芸映画製作の巨壽は沈まることを知らなかった。文芸映画イコール名作であったこの時代において、そうした流行的傾向は日本映画を近代芸術の頂点に向って急速度に前進させることを意味していた。〝活動写真〟の時代は完全に終っていた。

若い野心的な監督は、次々と格好の原作を探し出して、北村勉のようにすぐれたシナリオライターの筆を得て、それを映画化することで高い世評をかちえていた。いうなればそれは、文学作品を映画によって征服するといった観すらあった。

十二年前に私はシナリオの仕事でモスクワを訪ねたとき岡田嘉子さんのご好意で、日本では二度とみられない、藤森成吉原作の無声映画の傑作「何が彼女をそうさせたか」をモスクワ映画博物館で観せてもらうことが出来た。この映画は「お花さん」と改題され大切に保管されていたのにはおどろいた。

戦前、地方都市の中ではずばぬけて映画館への観客動員の多かったのが高知市である。是非共高知市に、日本最初の映画博物館のようなものを作っていただきたいと希っている。

私は今でも坂本龍馬と同じ土佐に生れたことを誇りとしている。

（シナリオ作家）

高知雑感～音楽など

瀬戸口　重利

高知に住むようになって、はや十八年が過ぎた。当時の私はまだ二十代だったので、この地に永住しようとか、しないとか、とにかくそんなことはあまり頭の中にはなかったように思う。しかし、今では高知は私の第二の故郷であり、私の子どもたちにとっては故郷そのものだ。高知に来る前に何人かの人から高知についての予備知識をいただいた。降れば土砂降り、水がうまい、女の人たちが強い……などである。私は意外にはやくこれらを実感として知ることができた。雨が降ると時として、バケツを引っ繰り返したような…とはまさにこのことだと思わせるし、止めば止んだでそのあとは息をするのも苦しいような蒸し暑さ。でも今では住みなれてしまってそれほどではなくなっているが、はじめて高知に来た人はたいていそう感じるにちがいない。しかし逆に、このような雨が降るからこそ高知の水は飲料水としての量と質に恵まれ、そのおかげでいろいろな名酒が生まれるのだろうと素人なりに想像する。女性もよく酒をのむ。その量の多さにびっくりさせられることが多い。酒と関係があるのかどうかはわからないが、たしかに高知の女性は気性が激しいようだ。高知に来て間もないある日、朝倉電停の待合室で電車を待っていると、中年の女性が入ってきた。そして何やら定期券でも買うつもりだったのだろうか、窓口に並べられたいくつかの用紙の中のどれに記入したらよいのか係員にたずねたが、係員は「そんなことは自分でよく見て探しなさい」というような意味のことを言った途端、彼女はかんかんに怒って、「わからないからこそたずねているのだ」とそれはそれはものすごい声で言い返していた。私は恰も自分が叱られているような気がして居たたまらなくなって、そっと待合室を出ていったくらいだ。高知に来たばかりの私にとってはタイミングも悪かったのであろうが、「やはり高知の女性は強い」という印象を強く受けてしまった。しかし、こう書くと私が高知を嫌っているかのように受けとられるかも知れないが、そうではなくて、私は高知をたいへん気に入っている。大好きなのだ。じっと見上げていると、身も心も吸い込まれてしまうのではないかと思われるあの美しい秋の青空…など、高知の大自然のすばらしさもさることながら、何よりも高知人という、その人間味が好きである。一般的にみて、気性は激しいが、素朴で親しみやすいものを持っている。言葉使いも荒っぽい。その上、特に男性に見られる少し鼻腔にひっかけるような発音。「ほら、ほら」とよく連発する。しかし、それらを聞いたり話したりしていると、何故か安らぎをおぼえる。そして、「あの人は何を考えているのかわからない」というようなことがあまりない。また、高知というところは昔から良いことでも悪いことでも全国的なニュースになる事件が度々おこるし、話題に事欠かない。まことに起伏の激しいところだ。私はそこにある種のエネルギーに支えられたリズムを感じる。さて、このような高知に育くまれている音楽はどうであろうか。私の専門との関係で、ここではクラシック音楽だけに限って考えてみたい。高知は何人かの日本的な音楽家を生んでいる。優れた才能に恵まれた未来の音楽家も多く、将来も数多く音楽家を輩出していくであろう。一方、地元で行われる演奏会などに目を向けてみると、東京や外国からの一流演奏家による演奏会、地元のアマチュアやセミプロによる演奏会などけっこう数多く催されている。また、いろいろなコンクールもさかんで、それはそれなりの意義は認められよう。そして、このような傾向をみる限りでは音楽文化が人々の間に定着しつつあるかのように見受けられる。が、はたしてどうであろうか。私には高知人のもつ激しいエネルギーと音楽が結びついているようには思えない。消極的で表面的で、何かが欠けているように思われる。あまり参考になるとは思えないが、ここでちょっと外国に目を転じてみたい。私は四、五年前、アメリカのハーバード大学でしばらく勉強する機会があったが、その間、なるべく多くの演奏会に出かけるように努めた。ボストンシンフォニーなど一流の演奏会はもちろんのこと、小さな演奏会にも足を運んだ。しかし、私が最も楽しみに聞いたのは、街角で開かれるミニコンサートや、大学の寮の図書館で開かれるコンサートの方であった。街を歩いていると、すばらしい弦楽四重奏のひびきが店の前の人だかりの中から聞えてきた。何だろうと立ち止まってのぞいてみると、若い四人の女性が熱心に演奏していた。こんな風に、街角のあちこちから生の音楽が流れ、それをとり囲んで人々が聞きいっていた。またハーバード大学は全寮制なので大きな寮がいくつかあり、寮毎に毎夜のようにコンサートが行われている。しかも演奏しているのは音楽を専攻していない素人の学生たちだ。そして演奏の内容、質ともに私を納得させるのに十分であった。十二月に入りクリスマスも近づく頃になると、デパートの中の一角で毎日静かに楽団演奏が行われていた。「生活に音楽がある」というのはこのようなことを言うのかもしれない。もちろん、風俗や習慣などの異なる我が国で、これと同じようなことができるとは思わない。でも、音楽が舞台の演奏者と客席の聴衆のみで終ってしまうのは何かさびしい気がする。もともと文化とは、一口にいって人間が死にたくないという欲望から生まれたものだ。つまり受身ではないはずである。音楽をいろいろな場所で、いろいろの人々が、いろいろな形で楽しめるようになれば、と思っている。高知はそれができるようになるところかもしれない、と私には思えるのだが……。

（高知大学教育学部教授・音楽）

第一回原社中展作品

手仕ごと一筋（三）

手漉き和紙用竹ヒゴづくり

高橋房美さん（井口町）

文　西岡寿美子
写真　岡崎禎広

何ともいい顔のおばあさんである。あたたかい。滋味がある。永年身体を使って働いてきた人の、芯からの健やかさが内から皮膚を輝かせているのである。話を聞く前に、わたしはこの人の顔に見惚れた。

「あたしのような阿呆げな仕事は誰もやりやしません。手間はかかる、収入はすくない、人より鈍な者のすることですらあ」高橋さんは何度もこういいながら、筒切りにした青竹を取り上げた。

竹はハチクで、夜須から仕入れた八月のホーカイ竹である。ホーカイ竹というのは、盆の迎え火を焚く頃に伐った竹のことだそうで、そういえば、盆

の入りに割り松を組んで門口で焚く火を、ホーカイ火と呼んでいた。この頃に伐った竹が一番性がいいそうで、昔から高橋さんは夜須のホーカイ竹を使っている。

節間は尺二寸以上。約四十センチ。それ以下の短いものは役に立たない。だから一本の竹で、七つか八つの節しか使えない。この筒竹を台の上にのせて、竹の元の方から一センチ間隔くらいにカマで縦に割る。次いでこの割竹を皮と身の間の微妙な部分二ミリばかりを残してへぐ（はがす）。ほのかに皮の青味のある薄片を、仕上げの寸法から割り出して先端を細分する。ささらとなった先端の部分を手で握り、右に左にと竹をねじりながら上から下へしごく。手の動きにつれて繊維なりに裂けた角ヒゴの一方をナイフで削ぎ、鋼板の細かな穴にさし込んで、ペンチで引き抜いて粗削りをする。もう一度抜いてすべすべの丸ヒゴに仕上げる。高橋さんの仕事の、大まかな工程はこうである。

何だ、竹を割ってヒゴを作るだけのことではないか、と思うだろうが、これがなかなか容易でない。身ばかりでは折れる。皮ばかりでも曲がる。竹の皮でもなければ身でもない、両方が微妙に表裏をなした径一ミリ内外の、そうめんくらいの細ヒゴとなれば、これはもう目ではない、指先の感覚の技である。

金尺五分、といえば十五ミリくらいだろう。この五分の間に大は九本、小は三十七本も並ぶヒゴを抜くのは、そうそう誰にでもできることではない。十五ミリに三十七本並ぶためには直径〇・四ミリに仕上げねばならない。人間の髪の毛くらいの竹ヒゴと考えたら当るだろうか。土佐和紙の優品典具帖紙の簀桁は二十三本大。そう細かいともいえないこの程度の竹ヒゴでも直径〇・六ミリ。径一ミリに足りない竹ヒゴを抜くのに、身の方を先に、皮の方を後にもう一度抜く、と聞いてうなってしまった。

微細な仕事には更に微細な仕事が続くもので、高橋さんの竹ヒゴは、次には別の人の手によって、渋をひいた絹糸で簀に編まれ、枠と吊手をつけた簀桁につくられる。厚くも薄くも、密にも粗にも、紙の溶液をその上で揺りながらして、手漉きで風味ある和紙を漉くためには、簀桁になる前の、ヒゴの均質がまず望まれるのはいうまでもない。

「竹がカジ（朽）ることさえなけりゃ、何十年でも使えますらあ。あたしが若い時に抜いた簀も、まだあちこちで使われよります。そりゃあ、糸は切れるきに編み直さにゃいきませんが」というのを聞いても、竹の精髄を抽いた部分であればこその長命であろう。

高橋さんは、明治三十三年三月生まれ。満八十五歳である。きれいに結い上げた前髪は白いが、陽にやけたふく

よかな頬と、打てばひびく応答は年齢を感じさせない。「貧之して貧之してそれはそれは難儀をしました」と話すが、およそ苦労ばなしの似合わない福相の人である。「生家は紙漉きをしよりました。母親が無うて、兄嫁がかりでしたきに、五つばあから子守りですらあ。あたしも子供じゃからねぶたい。ねぶとうても起きたらすんぐ子を背にくくりつけられ、家から追い飛ばされる。晩も陽があるうちに帰んで子を泣かしたら怒られる。父親が垣でホーイと呼うでくれるまで、山道の上の方のヤブ蔭で待ちよったもんですらあ」。

小学校は出来ていたが、そんなわけで行ったり行かなかったり。ヒゴは十歳ではじめた。紙は手漉きが主だったその頃だから、需要はいくらでもあった。叔父（父の弟）の許で仕事を習いはじめ、以来八十年近くヒゴに関わってきたことになる。

結婚は十九歳。ご主人は二十三歳。「お見合いで？」と聞いたら、「ええまあ、知っちょりましたきに」となかなか味な答えである。「同じ仕事をしよりまして。何せ身内ですきに。叔父の家内の弟があたしの連れ合いですらあ」とほほえんだ。浄瑠璃の文句ではないが、少女の日から並んで仕事をしてきて、「四つ違いの兄さん」と慕い合った仲なのであろう。子供は三人。

生業とする以上、ヒゴつくりにも一人前の仕事量がある筈である。一時間にせいぜい百本。一日十時間働いても千本止まりだろうと見当をつけたのだが高橋さんの口からはおそろしい答えが返ってきた。

ヒゴはものの大小によらず、三千本揃えて「一ケタ」と呼ぶそうで、流通の単位もそれであったものらしい。一日で何と、「一ケタ以上つくった」というのである。普通、粗拵え一ケタが一日量、粗拵えしたものを抜くだけでも、一ケタが一日量といわれたもので、それだけこなすにも現今のような八時間労働ではない。夜のひき明けから夜なべまでしてのことだろう。高橋さんのように一日一ケタ仕上げるためには、「あけてもしごとくれてもしごと。やってやって、やり抜いて、鶏がうたうまで」働いたのである。

幸い健康に恵まれていた高橋さんはそんな苛酷な労働にも、一度も病気をしたことがない。「ロクなものも食べず、休みもせず、ただ一無尽働いて、それでもあたしのように長生きしますきに」ふしぎですと話すのが、ご本人の口から聞く言葉だけに、自ら鋭い文明批判と聞える。

高橋さんは、出生地の須崎市吾桑から、昭和三十三年に現在地へ越してきた。当時サラリーマンの給料が一万円前後だったと思うが、七十五万円の家土地を買うために、どれだけのヒゴを高橋さんは抜いたことか。天文学的ともいえるヒゴの数を頭に浮かべ、こういう生き方もあるのかと、そのはかりしれない忍耐の労働量の尊さに、柔和な高橋さんのお顔を、わたしはまぶしく、まぶしく見た。

一般に、手職の世界では道具を非常に大切にするものである。選択もきびしい。高橋さんの竹を割る時の短い柄のついたカマ、割竹をはがす時の庖丁。いずれも握りは手になめされてトロトロと光り、指の跡が凹むまでに使い込まれている。刃の幅もごく薄くなっている。どちらも高橋さんが生まれた頃、地下の鍛冶が打ったもので、八十年以上使っても今出来の物とは代えられない切れ味という。

また、手職の人は道具も創り出してゆくもので、実に合理的で簡潔なそれは、その世界の人にしか生み出せない独創性をもっている。高橋さんの場合も、割竹の先端を細分する時は、ずらした二枚の鋼板に突き当てているし、ヒゴを抜くのも様々な口径の穴を穿った鋼板である。作業台は角材の切れ端。台に一寸した鉄棒をとりつけて、割るのも抜くのもその股へヒョイと挟んだ鋼板を使う。道具というにはあまりに単純な、この三センチに十センチばかりの、薄いハガネの板の効用には驚く。聞けば昔のラッパ蓄音機のゼンマイを切ったものだそうで、見た目には玩具にもならないすすけた鋼板だが、陽に透かせばカスリ模様に見えるヒゴの細密な穴など、美しくさえ見える。必要の生んだ創意のすばらしさである。

土佐和紙は国の伝統工芸品に指定。手漉和紙用具製作技術は県の無形文化財に選定されている。高橋さんは眼を悪く（白内障）して今は仕事を休んでおられるが、県内ではただ一人の技術保持者である高橋さんが、早く癒えて待ちかねている業界の需めに応えてほしい。後継者も育ってほしいと、よそながら願わずにはいられない。

昭和五十九年度――学術研究助成事業適用一覧

土佐自由民権運動七千日の日録作成

土佐自由民権研究会
代表　外崎光広

明治七年から明治二五年の選挙干渉事件までの土佐自由民権運動に関する毎日の事件を日表にして基礎資料を作成する。

土佐自由民権資料集成

高知短期大学教授　外崎光広

自由は土佐の山間より、と誇示してきた高知には自由民権の基礎資料集が刊行されてなく、そのため研究が遅れ、誤解も少なくない。そこで土佐自由民権運動に関する資料の収集と厳密な校正、解説をつけた基本文献を作成する。

高知市を中心とした言語の伝播――国道三三号線ぞいに――

高知女子大学助教授　高橋顕志

新しい言葉は、常に文化の中心地から放射され、同心円状に伝播してゆくという「方言周圏論」の考え方がある。高知県レベルで考えた場合、高知市はその中心地の資格を備えている。高知市で発生した言葉、あるいは高知市にいちはやく移入された言葉はどのように広がってゆくのか。国道三三号線ぞいに地点をとり、実地調査をふまえて高知市からの言葉の伝播過程を研究する。

高知県における占領期行政と社会的諸問題――とくに婦人問題を中心として――

高知女子大学教授　池川順子

占領期研究にはかなりの努力がなされてきたが、地方研究は皆無と言って良い。GHQ／SCAP文書を中心として、膨大な占領関係資料が国会図書館を中心に収集されてきた。マクロな背景をふまえながら、高知県関係の一次資料を収集、分析する。

高知市民の健康実態及び医療需要に関する調査研究

高知医科大学衛生学教室
教授　中村健一

高知市民の健康の実態疾病受療状況、保健医療サービスに対する需要等を知ることにより、今後の健康づくり事業策定の基礎資料を得る。

高知県第一次産業とその加工に関する研究

高知大学人文学部経済学科
講師　田村安興

高知県は山村が多く、平野部が極端に少ない。農漁民は藩政時代から米作のみに依拠せず、多様な商品生産物を生産した。例えば、干魚、かつおぶし、さんご加工業、紙などである。いずれも第一次産業の生産物を加工し、特産化したものであった。今日、これらは構造的不況下にあるが、新たな一・五次産業の方向を模索するうえでも、高知県の近代における在来型の一・五次産業の発展過程を明らかにし、分析を加える。

高知市在住六五歳以上老人の生活実態に関する調査研究

高知女子大学家政学部
看護学科助教授　松本女里

高知市在住六五歳以上の老人の健康実態ならびに日常生活状況を知ることにより、今後の老人保健対策の基礎資料を得る。

（この制度の問合せは財団まで）

龍馬サンバと私たち

社会人音楽集団「ぐうぴいぱあ」

私たちのまわりで龍馬サンバの風が、まるで龍巻みたいに吹き上がっている。会う人ごとに、見たよ、聞いたよ、良かったネ、と声をかけられる。アマチュアの一作品が、これ程までに社会に向かってアピールすることは画期的である。龍馬生誕百五十周年という話題性はあったとはいえ、とまどう程の盛り上がりは、私たち「ぐうぴいぱあ」七年の歴史のなかでも初めてのことだ。

独力で宣伝する手段も余裕もないアマチュア・バンドとしては、話題づくりや時流にのせることを常に考えながら、思いつく限りの活動を続けてきた。百曲の自作曲、オレンジホールでの二回のソロ・コンサート、延べ一万三千人の観客、二枚の自費製作LPレコード……。これらすべては、アマチュアばなれした活動として自負はするものの、「こればあ、ガンバリゆうに」と思うほど、社会的認知は低い。

それが、たった一曲の龍馬サンバから、龍馬音楽祭やよさこいまつりのなかの企画など、様々な場づくりや機会づくりが、進められている現状を、心からうれしく思う。

七月十九日にオレンジホールでの第二十回定期演奏会を控えた私たちは、この三月から県下各地を巡ってコンサートを開いてきた。夜須町、香我美町、土佐清水市のそれぞれ地元アマチュアバンドとともに開く音楽会は本当に気持ちがいいものだった。何となく未来が見える……そんな気がしてくる。

「明日の文化を創造するのは若者たちだ」と言われても、その若者たちが存分に自分を表現できる機会や、力を蓄えてお互いを磨く場は、あまりにも少ない。一般に「頑張りのきかない」と言われる若者たちだからこそ、頑張り甲斐のある目標とそのシステムづくりに私たちも積極的に参画してゆきたいと思っている。南国市の山上の牛小屋を改造したスタジオに、仕事の疲れも見せずに今夜も集まってくる素晴らしい八人の仲間たちとともに。（リーダー島村一夫）

龍馬塾

21世紀にむけて世界の土佐を考える

今、高知の産業は、交通網の整備や高度情報化など、大きな時代の波に直面し岐路に立たされています。

この現状を逆にチャンスとしてとらえ、四国を、日本を、そして世界を見通し、共に考え、行動する経営者集団づくりとして、会員制戦略経営塾「龍馬塾」を本年一月より発足させました。

「龍馬塾」は異業種の若手経営者を会員とし、経営規模も年商三百五十億を越す四国のトップ企業から小さくても長期の展望を持ったベンチャー企業まで、広く深い組織となっています。

「龍馬塾」は月一回開催し、

①チャレンジ精神を持った異業種トップ間で忌憚の無い意見を出し合い、異なった発想の中から新しい事業展開のヒントをつかむと共に、相互の特色を生かした提携を進め、情報交換をする

②広く全国から急成長している企業のトップを招き、経営体験のエキスを本音で吸収する

③中央の一流マーケティング専門機関との提携により、基本的な戦略のノウハウ、流通ルートの選定、全国的な人的ネットワークづくりを行う

の三点を重点として運営しています。

人間開発なくして郷土の発展は望めないと考えます。また、高知の企業が発展する事によってのみ、高知に優秀な人材と商品が生まれ、高知の経済と文化が振興し、豊かな郷土づくりができると確信します。

「龍馬塾」はこの課題を担う集団として活動してゆきたいと願っております。

（世話人代表　杉原郁夫）

連絡先　電話　㉕1567

子どもと本をつなぐ

高知県子ども文庫連絡協議会

子ども文庫は、家庭や地域の集会所などで開いている、小さな図書館です。開館の日時、本の冊数、お世話する人数などはまちまちですが、それぞれの文庫の持ち味と個性を生かしながら、子どもの身近かに本を、との思いから活動を続けています。

みつばち文庫の子どもたち

子ども文庫の皆さん

高知の子ども文庫の第一号は、1960年に本山町上関に生まれました。1977年には、高知県子ども文庫協議会が発足、現在は県下の二十三の子ども文庫が参加しています。参加していない文庫や準備中のものもいくつかあるので、実際の数はもっと多くなります。

地域別には、高知市に十二、本山町に五、須崎市、土佐町、越知町、南国市、香我美町、室戸市にそれぞれ一つずつあります。

蔵書数は数百冊のところから八千冊以上のところまであり、自分の本だけ置いている文庫、図書館から借りている文庫、といろいろです。

利用者は年々増えています。昨年の統計では、高知市内の九つの家庭文庫の年間利用者数は延べ六千百三十三名、貸出し冊数は一万六千四十三冊となっています。個人的なボランティアの労力と時間では限界を感じるほどの盛況です。

良い本をより多くとの願いから、図書館や文庫活動の先進県に学んで、文庫への団体貸し出し制度の実現、車による文庫までの配本などを行政へ働きかけています。実現に向けて、市議会への請願などの行動も始めました。生き生きとした子ども文庫活動の発展のために頑張ってゆきます。

（事務局　野本秀子）

連絡先　電話　㊼4335

NHKロビー展

山崎和加

私どもNHK高知放送局では、多くの方が気軽に利用できる作品発表の場を、また、視聴者の皆様とのふれあいの場として昭和五十五年四月から二十坪ばかりのロビーを展示場に利用したNHKロビー展を開設し、今年で六年目を迎えております。

この間にご利用いただいたグループは、手工芸、写真、陶芸、絵画、ちぎり絵などさまざまな分野にわたり、開催回数は百八十回を数え、訪れて下さった方は五万人にも達しております。今では、開設当初考えられなかったほど多数の利用希望者が殺到し、担当者は多くのご希望にそいたいために、日程の割り振りに頭を悩ませております。

ご利用いただいたグループの皆様から、手前味噌で恐縮ですが、「今までNHKは堅いイメージで入ったことがなかったが身近かに感じてきました」、「今どき無料で貸し出しをしてくれるなんて!!」、「他の会場にはない電波を使った紹介もありこれは大いに助かります」といった声が数多くよせられています。

テレビでのおしらせは、今年四月から始まった午前十一時四十五分からの「ホット情報こうち」で、特に毎火曜日にはその週の主催者の方にご出演いただき、生放送で展示の紹介をしていただいています。

また、十二月にはNHK歳末たすけあいの協賛として、趣味の手作り作品を一堂に集め、チャリティー販売を行い、収益の一部をご寄付いただくなど社会福祉にも役立てています。

潤いのある生活を求めて、地域や職場で盛んになる文化芸術活動に私どものロビーが、一役を担えることはこのうえない喜びでございます。

（NHK高知放送局　庶務部ロビー展担当）

連絡先　㉓2300（内線271）

風伯

為政の理念

日本中がどんどん画一化されていく中で、全国どこに行っても同じ街並みや生活風情になっていき、いい意味の土地柄が失われていくように思われるのだが、よくみるとそうでもない。

昔から、ところ変れば品変わると言われるように、長い歳月のあいだに培われてきたお国柄は、それなりに存在の意義を持っている。人間というものは長い間地域に定住していると、その自然条件や生活様式に順応する体質や気風をもつようになる。それが何代も繰り返されるうちに、やがて地域的特性となってひとつの〝地方性〟を形成するのだ。だがそのすべてが誇るべきものであるかというと、そうではない。

いま各地で、伝統の見直しや新しい地方性のあり方についての実験が試みられている。そして、それらに共通していえることは、〝こころ〟の運動として進められていることである。流行の〝一村一品運動〟にしても、単にその土地の特産品をつくればよいという物つくり運動ではなく、もっと本質的な村そのもののあり方を問う運動の側面をもっているのである。いかに小さな村や町とはいえ、今日の産業構造の中で、一つの特産品をつくればそれで村や町全体が活性化するというものではないのだ。

文化振興の問題もまた同じだと考えるが、最近その振興が叫ばれる割には、当局者にこうした理念の燃焼が余りみられないのはさびしい。

（華）

松山放送局の快作

自由律俳句は、日本の詩型のなかでももっとも放埒気ままなもののように思われている。荻原井泉水を旗頭に種田山頭火、尾崎放哉、この三人がとくにすぐれた作家であった。自由律は散文詩に刺激されて生まれてきた近代の所産といえるが、本来は井泉水にしても伝統俳諧の中で育ってきた人であり、いわゆる芭蕉俳諧の精神をもっとも純粋に受継ぐものという自負のもとに鍛錬道を歩んで来た。一方ではそうした伝統詩とは別個に近代生活詩を自由律にもとめた人たちもいたが、それらの作者は早く崩れ去ってしまっている。

最近先の三人の中の一人尾崎放哉の最晩年をドラマ化した映画がテレビで上映された。舞台は小豆島で、松山放送局の製作にかかるものである。原作者・吉村昭氏の言によれば、もっとも忠実に脚色され演出されていたという。地方局でこれだけの作品が生まれたことは珍しいというより地方局なればこそ、生まれたといえるだろう。都会地の商業テレビには、到底生まれてこない作品である。その内容を一口に云えば、詩人尾崎放哉が、その資質をいささかも矯めることなく、近代社会の中で破れ去ってゆく姿を描いたものである。しかも、周囲をとりまく小豆島の人々がそうした彼を静かに温かく視護ってゆく姿が、島の自然の中で美しく描かれる。毎年NHKの芸術祭作品というものが発表されるが、いつもその近代の薄汚い意識過剰と思い上がりにヘドを催す。今年は、この「海も暮れきる―小豆島の放哉―」を是非参加させてはどうか。松山放送局のというより近来のNHKの傑作である。

（由外）

ときを超えて今よみがえれ
龍馬音楽祭

七月十四日（日）
午後五時開場・六時開演
県民文化ホール（オレンジ）

若さ、未来性、国際性、行動力、無私の心、大きな心情など、龍馬のイメージをあなたは音楽でどう表現しますか、という呼びかけに応えて海外からのも含め全国から四百二点の「龍馬のうた」がよせられました。このほど入選歌詞に対する曲付けの審査も終わり、入選曲が出そろいました。この入選曲二十一点をさらに厳選して、龍馬音楽祭のノミネート十三曲が決定しました。

龍馬音楽祭には、入選者が各地から自作の曲を持って集合し、県民文化ホールで演奏を行い、龍馬のうた大賞（一点）、金賞（二点）を競います。龍馬に対するさまざまな思いをポップス、歌謡曲、フォーク、ロック、ピアノ・ソロ、太鼓などの音楽で表現します。

大きな反響に大きく応える龍馬音楽祭に、是非ご来場ください。

出演予定者（順不同）

廣岡しょうじ、美崎一也（兵庫県）
和泉陸郎、遠藤三雄（新潟県）
森　茂（香川県）
森本康宏（広島県）
龍馬維新太鼓（南国市）
高橋康則（姫路市）
吉村邦夫（東京都）
北村昭人（三重県）
妹尾哲巳（島根県）
広田雅彦、西尾澄気（高知市）
ぐうぴいぱあ（高知市）
野並節子、弥生（高知市）
安岡充樹子（高知市）

ゲスト

高知フラワーソングクラブ

賛助出演

スガ・ジャズダンス・スタジオ

入場券　一般　三百円
　　高校生以下　百円

＊県民文化ホール
　高新プレイガイド
　市内レコード店で発売中

RYOMA MUSIC FESTIVAL '85

7月中旬発売
市内レコード店で

龍馬サンバ
〈楽譜・振り付けつき〉

詞・曲・歌　島村一夫
編曲・演奏　ぐうぴいはあ

定価 800円

龍馬サンバのコスチューム
▼右下の写真

龍馬のTシャツ

デザイン　祖父江　建樹
取り扱い　財団・高知市観光協会

定価 1,500円

高知県方言辞典

限定 予約 募集中（昭和60年7月末日まで 財団または各書店で受付け）

定価 6,000円　予約特価 5,000円

高知市文化振興事業団
発足記念出版

特徴　古語から現代語にいたるまでの土佐方言約14,000語を網羅。県下全域にわたって現地協力者を得て、あらゆる日常方言を蒐集。見出し語にアクセント記号を付し、例文を示し、注釈を加えた。方言学者土居重俊、浜田数義両氏の半生にわたる調査研究の集大成。画期的業績。

造本・体裁　A5版・上製・貼函入・約750頁

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780 高知市本町五丁目一番三十号
TEL〈〇八八〉㉓四三六五
郵便振替 徳島8-14869